

研究所だより

第467号
2024年 2月19日
発行：土佐清水市教育研究所
TEL 82-3015

“ 春は名のみ 風の寒さや
谷のうぐいす 歌は思えど
時にあらずと 声もたてず 時にあらずと 声もたてず

春と聞かねば 知らでありしを
聞けばせかる 胸の思いを
いかにせよとの この頃か いかにせよとの この頃か ”



「早春賦」 1913年(大正2年) 日本の唱歌

「梅一輪いちりんほどの暖かさ」と言いますように、各地から春の訪れを告げる梅の開花・梅まつりの便りが届く頃となり、15日には幡多路にも春一番が吹きました。まだまだ寒い日が続きますが、日脚も延びて、少しずつ春めいてきたようで嬉しくなりますね。

.....

「指導と評価」2月号より

教師のワークライフバランス

明治大学教授
もろとみ よしひこ
諸富 祥彦

教師にとって、仕事と私生活のバランスをとることはかなり難しい課題である。子どものためなら、私生活をなげうってでも教育活動に取り組む。それが理想の教師像だと思われてきた。それが伝統的な教師像であろう。

しかし、こここのところ、長時間労働の実態がクローズアップされ、教師の「働き方改革」が盛んに進められている。今や、早く学校を去るのが、よい働き方だという風潮である。いつまでも学校に残っていると、管理職から「そろそろ帰りますよ」と声をかけられるという場面も、もはや日常のものとなってきた。

これは、基本的には、よい流れである。教師にも、当然、私生活がある。自分の生活があり、自分の家庭があり、自分の子どもがいる。結婚していない教師でも、自分の生活を充実させる権利がある。そのような当然のことに、ようやく光が当てられはじめたのである。



●人生におけるバランスは常に均衡ではない

教師は、自分の仕事(ワーク)ばかり大事にする傾向がある。私生活(ライフ)を犠牲にしがちだ。そのバランスをもっと大事にすべきだ。そのようなきわめて常識的な見解が、教師のワークライフバランスを大事にしようという考えである。これは一般論としては、きわめて正しい。

一方、どの仕事でもそうであろうが、仕事に燃える時期というのが、ある。私は、カウンセラーであり、大学客員であり、作家であるが、二十代三十代のある時期、また四十代五十代になっても、時折は「健康を書してでも、仕事に取り組みたい」という時期があった。「ここから納得のいく仕事をするには、命を縮めてもかまわない」—そのように思い、仕事に打ち込んでいる時期もあった。

そのような時は、ワークとライフのバランスなどいらない。「ワーク、ワーク、ワーク」でOKであり、全生活を投げうって仕事に取り組まなければいけない。そのような時期があった。教師も同様であろう。

教師にとって魂を燃やすべき相手は、なんといっても、目の前の子どもたちである。「この子どもたちのために、私のすべてを燃やしたい」「多少、生活を犠牲にしてもかまわない」そのような思いで、日々、取り組んでいる教師たちがいる。「魂の教師」たちである。

そのようなステージにいる教師にとって、「ワークライフバランス」などと言われても、ピンとこない。「ワーク、ワーク、ワーク」でなければ、魂が満たされないのである。

教師が一人前の教師になるために、そのようなステージを一時期迎えることは大きな意味があるだろう。授業研究や教育相談や生徒指導に燃え、勉強のために、休日も投げうって、私費で研修に出まくる。出たい研修であれば、全国どこにでも行く。仕事のためにすべてを投げうつことで、大きく成長していく時期もある。しかし、そのような在り方では、いずれ、行き詰まる時期がくる。

ある教師は、教員の世界だけに染まっては視野が狭くなると思って、経営大学院に通い、教師以外の人と交流することで、自分の視野を広げた。別の教師は、趣味のサークルに通うことで、自分の世界を広げた。二人とも「教師以外の世界の人と交流することで、自分の世界を広げることができる。自分をより広い視点で見ることができるようになる」とその意義を語った。

また、人生のステージが変わることで、私生活にもっと比重を移さなくてはならなくなることもある。子育てと親の介護が代表的な例だろう。自分の成長のためにというより、家族の必要のために、多くの時間とエネルギーを注がなくてはならなくなる時期がある。



●教師の声から

ある教師は語る。
「働き方改革といっても、一律におこなうと形ばかりのものになってしまいます。自分の教師人生を考えても、仕事のことばかり、朝から晩まで考えている時期がありました。仕事のためにすべてを投入する日々。それがちょうどいい時期もありました。二十代から三十代前半の十年くらいは、そんな時期でした。けれど三十代半ばになると、もっと視野を広げる必要を感じるようになって、趣味や勉強でも、教師以外の人と交流するようになりました。そして、四十代後半のいまは、親の面倒を見るために、かなり時間を使うようになってきました。ワークとライフをどうするか。一人一人、みんな違う人生のステージにいるんです。一人一人の教師の人生のプロセスにそって、ワーク中心の時期もあっていいし、ライフ中心の時期もあっていい。そのような多様性を認め合うことで、お互い心地よく働くことのできる職場になるようにしておくことが大事だと思います。それを一律に、そこから、ワークライフバランスをこうしなさい、と枠にはめられるのは、なんだか違うと思います」

この教師が最近の働き方改革について思うのは、「とにかくはやく学校から出なさい」という雰囲気の中で、教師同士のつながりが希薄になりつつある、ということだ。「教師をしていると、さまざまな思いに日々駆られます。嬉しい思いにも、やるせない思いにも、絶望に近い思いになることもある。そんなとき、同僚の先生と、思いを語り合いたくなる。同僚の先生と、日々、いろんな思いを語り合うことで、なんとか、ハードな仕事を頑張っていられる。だけど、働き方改革で、とにかく、はやく校舎から出ることを強いられて、そういう雑談やおしゃべりの時間をもてなくなってしまいました。同僚の先生方との、つながりが希薄になってしまっている気がします」

●働き方改革に

教師のワークライフバランスは、一律にこうせよと型にはめることができるものではない。生活の全部を投げうって教師生活を送る時期があってもいいし、私生活にかなり重点を置いてなんとか教師を続ける時期があってもいい。学校からはやく帰宅したほうがいい時もあるし、遅くまで残って同僚と語り合うほうがいい時もあるし、一人一人の教師生活のプロセスはみんな違うのが当然である。

一人一人の異なる教師人生のプロセスを、お互いに大切にしあえるような、そして、その選択を可能にできるような学校運営こそが、働き方改革において求められているものである。そのためには、管理職をはじめとした教師たちが、互いの人生の思いに耳を傾けあうことができる、そんな姿勢がまず必要であろう。

第2回学力向上検討委員会

2月 8日（木）に第2回学力向上検討委員会が開催されました。

令和5年度高知県学力定着状況調査の自校採点結果を基に、市全体（小中学校別）を「問題の内容」「出題のねらい」「領域別・観点別・問題別」「目標数値（正答率）」の項目ごとに傾向と課題について話し合い、今後の取組について確認しました。

正答率で見ると、小学校（国・算・理）は、目標値を上回っています。中学校（国・社・数・理・英）は、目標値と同等もしくは下回っています。

課題として、・無解答が多い、・記述式問題が弱い、・「知・技」が定着していない、・活字離れ（読書量の減）などが目に付きました。

各校においても、既に自校採点による学力定着状況調査結果の分析を行っていると思います。16日には業者採点結果が戻ってきます。今後の取組として、学年の実態に合った取組ができていたか、何が課題であったか（問題を読み取る、解けなかった問題が解ける）など再度分析し、授業改善に生かしながら、新年度早々に実施される全国学力・学習状況調査（4/18）に向けて計画的に取り組んでいただきたいと思います。

～第6回教研推進委員会～

2月13日（火）に第6回教研推進委員会を開催しました。本年度の教研活動の総括と来年度に向けての課題・申し送り事項、教研の在り方等について協議しました。

「教研の在り方」については、各校教職員、各委員から多くの意見をいただきました。ありがとうございました。時間をかけて協議しましたが、紙面の関係で確認、決定事項のみの報告とさせていただきます。

1. 2023年度の教研活動の総括（抜粋）

（1）年間の取組の反省

①教研推進委員会

- ・年間の取組等を推進委員会の中で協議できた。
- ・推進委員会の回数、日程、時間設定ともよかった。
- ・各校からの反省等はメールで確認するのでもよいのではないかと。

②教研活動

- ・各部会で研究授業を中心に研究を深めることができた。
- ・教科部会では勉強になることが多かった（研修内容が充実していた）。
- ・一日教研での塩田先生の講演は、内容がタイムリーで情報モラルについての指導に活用できると思った。
- ・中学校は領域別の部会を希望する先生が多い。

（2）来年度に向けての課題・申し送り事項

①教研推進委員会

- ・議題が反省等確認事項だけの場合は、メール等で済ませる。
*会の中で次の会の持ち方（メール等）について確認する。
- ・学校数が減り教研推進委員の人数が減るので、教研活動の役割分担の見直しが必要である。

②教研活動

- ・教職員が減っても、最良の取り組みをみんなで考え、伝統ある教研活動を土佐清水市の全教職員で推進していく。
- ・部長や研究授業を決めるのに時間がかかる現状があるので、人任せではなく、意欲的に参加する教研になればいい。

2. 2024年度以降の市教研の在り方について

各校、校長会、教育長から意見や提案をいただき、それらを基に時間をかけて協議しました。

来年度については、既存の部会で「今後の進むべき土佐清水市の方向性（探究学習・外国語教育・ふるさと教育・ICT活用）」を加味しながら取り組むようにし、次への再編に繋げることにしました。皆さんが納得する結論ではないかもしれませんが、下記の様な部会構成となりました。

なお、〔外国語部会〕については、市教研の組織から外し、〔外国語担当者会〕で引き続き研究することとしました。

○部会構成（8部会）

研究部会：〔国語（探究学習）〕〔社会（ふるさと教育）〕〔算数・数学（探究学習）〕
〔理科（ふるさと教育）〕〔情報教育（ICT活用）〕〔教育相談（心の教育等）〕

専門部会：〔養護〕〔事務〕

○成立条件：「5名以上の部員を必要とする」

*条件を満たさない場合は不成立となり、希望する他の部会に所属する。

3. 2024年度 第74次教研活動（組織・一日・半日教研等）について

（1）組織教研： 4月17日（水）15：10～ 会場：清水中学校

部会構成： 8部会 *上記参照

（2）一日教研： 8月 7日（水） 会場：中央公民館

午前：開会行事、講演

講演 講師 是永 かな子 教授（高知大学教職大学院）

演題 「調整中」

午後：部会研修

（3）半日教研：11月 6日（水） 会場：各会場

（4）総括教研：開催の方法・日程については各部会で計画する

*各部会・研究協力校・各研究会・研究主任等代表者会については、資料の配付のみとする。

4. 2024年度教研推進委員会について

・推進委員

〔小（4名）、中学校（1名）、校長会代表（1名）、教育委員会（1名）、教育研究所（2名）〕

*推進委員長：校長会代表 副委員長：推進委員会で互選

5. その他

（1）2024年度 第1回教研推進委員会について

・日時： 4月11日（木）16：00～

・会場：教育センター

